

日本アメリカ史学会 第54回例会報告

歴史実践のなかのアメリカ史—公共史（パブリック・ヒストリー）の可能性を模索する—

日時：2022年7月23日（土）14：00～17：00

会場：オンライン開催（ZOOM）

概要：

第54回例会は、「歴史実践のなかのアメリカ史—公共史（パブリック・ヒストリー）の可能性を模索する」と題した企画を行った。「何を知っているのか」という知識習得のみならず、史資料の読み取りや解釈を通じて「どのように知ったのか」という「歴史の見方・考え方」の習得も重視される新学習指導要領が、本年度から高等学校の歴史教育の現場で運用されはじめている状況を念頭に、まず日本の高等学校における世界史教育の現状と実践については徳原拓哉氏に、アメリカの中等教育機関における歴史教育の状況については川上具美氏にご報告いただき、アメリカ史研究および歴史教育活動の観点から貴堂嘉之氏にコメントいただいた。

徳原氏の「パブリック・ヒストリーにおける学校教室空間—「歴史総合」の歴史性に着目して—」と題する報告では、近年注目されている「パブリック・ヒストリー」の概念的理論的整理を踏まえながら「教室空間」の両義性（「パブリック」の内か外か）について指摘し、その「歴史実践の場」において、生徒たちの「学びに向かう姿勢」（非認知的能力）をどう評価しうるのか（生徒の認識のゆらぎをどう教員は観察しうるのか）、という点について問題提起された。また具体例として「白人の責務」や「第二次世界大戦の記憶」についての授業の様子（生徒の反応なども含めて）が紹介された。

川上氏の「歴史家をめざす教育—米国歴史教育の方向性—」と題する報告では、1994年から創刊されたナショナル・スタンダードが多文化主義的性格から伝統的米国史観へゆり戻されるなか、歴史的・批判的思考力や史料を読解する力を育成する姿勢を維持してきたニューヨーク州中等教育でのコア・カリキュラムについて具体的に説明された。特に「再建」に関する学習内容を扱うにあたって「再建期のアフリカ系アメリカ人は自由を獲得したのだろうか」という大きな問いを探究するために、フレデリック・ダグラスに関する史料を読み解かせることで、たとえば「ダグラスは南北戦争以前・戦争中は自由をどのように定義していたか」という小さな問いを考察するという教育実践になっていることが紹介された。

コメンテーターの貴堂氏からは、近年の歴史教育論のブームについて、アメリカ史の文脈でも19世紀から教育改革熱が存在していたことから、より長期的なタイムスパンのなか位置づけた議論の必要性が指摘された。また、アメリカ史研究において黒人史や女性史、先住民史をはじめとして、下からの社会史を積み上げていた経験があるなかで、「パブリック・ヒストリー」を問うことの意味を再考する必要性にも言及された。

約60名に参加いただいた総合討論では、討論型授業に対する高校生の実際の反応や学習

意欲にどういふ変化があるのか、読み解かせるための史料のレベルや質をどう担保するのか、といった具体的な授業実践の在り方についての議論が展開された。また、授業方法に熟知した高校教員と、史料分析に熟知した大学教員が相互に学びあう場の重要性についても提起された。歴史に関わる様々な主体(アカデミズム以外も含めて)を想定した「歴史実践」や「公共史(パブリック・ヒストリー)」という概念の有用性も含めて、これからの歴史教育ないし多文化教育では、どのような展開可能性が拓かれるのか、について、本学会としてもこれからも継続的に検討していく必要があると思われる。

文責 運営委員(池上)